“当事者意識を持った自立した学習者”の育成を主眼とした「授業／教師」のあり方（being）とやり方（doing）

－中・高・大の接続性を軸とした歴史教育の実践を通じて－

Strategies for Teaching Methods and Lesson Plans to Facilitate Autonomous Learning and a Sense of Ownership Within Students. －Through the Practice of History Education Centering on the Point of Relations between Junior and Senior High Schools, and Colleges－

杉山比呂之[1]
Hiroyuki SUGIYAMA

キーワード：あり方、やり方、マインドセット、当事者意識
Key Words ：being, doing, mindset, sense of ownership

１．はじめに－doing ではなく being－

「アクティブ・ラーニング」、近年の日本の教育界はアクティブ・ラーニング（以下、AL）というワードに席巻され、その状況はまさに“祭り”“ブーム”と形容しても過言ではないだろう。特に高校教育においては、これまでのチョーク＆トークの伝統的な一斉授業からグループワーク、プレゼンテーション、リフレクションシート、PIL（ピアインストラクションレクチャー）等を活用した授業実践が積極的に試みられている。しかしながら、AL が注目されるにつれ、そのやり方（doing）ばかりに目がいき、誤解や問題を生む状況が各地の学校で起きていることも事実である。しかし、AL は決してこれまでの実践を否定する新しいものではない。AL を促すことはやり方（doing）を工夫するだけではなく授業・教師のあり方（being）を見つめ直すことであり、being を軸とした AL を提唱したい。

私自身は、2012 年より AL を促すことを意識した日本史の授業［1］へ転換、AL を促す授業に必要なスキル＆マインドを教師自身も学ぶために「チーム作り講座」［2］を開講した。2016 年現在では「日本史を学ぶ、日本史で学ぶ」を being（あり方）の軸として、生徒の AL を促す日本史の授業を実践している。私自身はあくまで生徒が主語で、「“脳働的”に生徒が学ぶ（姿勢）= AL」と捉え、doing（やり方）ではなく being（あり方）と常に向き合いながら、“いま”その瞬間の生徒のための授業を心がけている。doing の部分では、オリエンテーション（授業）を重視したうえで、ＫＰ（紙芝居プレゼンテーション）法［3］を活用したレクチャーや「杉山の日本史オンデマンド」と称して YouTube で日本史の講義部分を動画配信。また、Twitter を活用した「Sgitter」を開設して生徒の“いま”に響くような情報を配信。さらに対話型リフレクション、生徒と教師の一対一の問答、評定をゴールにしない評価（ルーブリック［4］）のあり方などを模索しながら、目の前の生徒とともに授業を創り出している。

本稿では、高校のみならず中・高・大の接続性を軸とした歴史教育（高校日本史）の実践を通じて、“当事者意識を持った自立した学習者”の育成を主眼とした「授業／教師」のあり方（being）とやり方（doing）という視点で論じていく。

---

[1]専修大学附属高等学校地理歴史科教諭

２．本実践研究の位置づけ－「学習する学校（組織）」へ－

高校日本史の AL を促す授業デザインを通じて、AL を促すために必要不可欠なアプローチや、留意すべき点などを整理し考察する。本実践研究は優秀なパッシブラーナーが多い教師集団（教育現場）において、AL への誤解を解くとともに、Teaching & Learning 双方の必要性、Input → Throughput → Output のサイクル［5］、一教師としてのマインドセット［6］の確立などを提示し、学び合い、高め合える「学習する学校（組織）」［7］へのプロセスの一端として位置づけられる。

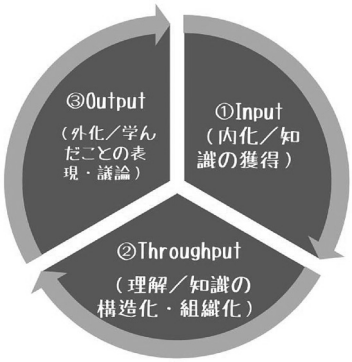

図１　筆者の高校日本史授業デザインの基本サイクル［5］。

図２　筆者のマインドセットモデル［6］。こちらに基づいた授業を実践。

３．“当事者意識を持った自立した学習者”の育成プロセス

高校日本史の実践を通じて、“当事者意識を持った自立した学習者”の授業デザイン、いわば育成プロセスを提示する。現在は通年単位で毎授業、いわゆる「AL 型」授業を実践している。ただし、あくまで私の授業は being & doing の一例であり、一般的には教科内の連携は当然ながら、他教科との連携、カリキュラム・マネジメント［8］の視点を持ち、目の前の生徒に即した授業デザインが必要不可欠である。ただ、高校日本史という枠組みのみで教材研究・授業デザインを行うのではなく、中学校での歴史教育でのインプットレベル、また大学における必要なスキル及びマインドレベルを踏まえてのアーティキュレーション（初等学校から中等学校、中等学校から高等学校への進学の接続関係）を意識した授業デザインが、高校教育における授業デザインには求められる。その意味でも、授業のやり方のみならずあり方、また何よりもゴールである評価のあり方を今後も研究していく必要がある。

日本史授業のあり方】場を創り、場に価値を＆日本史を学ぶ、日本史で学ぶ
【本授業デザインのねらい】
・授業の主役である生徒が主体性をもち、協働性・社会性を身につけ、フリーライダーにならない
・インプット→スループット→アウトプットのサイクルで知識の定着化を図る
・大学や現代社会で必要なプレゼンスキルを習得する
・プレゼンにおいて特に伝えたい部分＝中心を問うことでより深い理解を得る
・他者との相互理解により考え方の多様性を実感する
【年間を通じたグラウンドルール】
①※各クラスがオリエンテーション授業中に決定
②アクティブラーナーになるべし！（→自分自身で PDCA サイクルができる人間になる！）
③傾聴のスペシャリストになるべし！（→アンテナの感度を良くしよう！）

【日本史授業の基本的流れ（50 分想定)】
号令（生徒／最後の号令は行いません）
①【発表】生徒による前時の復習（ＫＰ法などによるプレゼン）［5 分］
②【共有】本日の Main Question ＆ Essential Question 共有＆実物史料など提示［5 分］
③【講義】ＫＰ法による本日の単元についてのレクチャー［5 分］
④【協働】ワーク（A）（B）（C）（個人／ペア／グループ）［20 分］
⑤【対話】生徒 vs. 教員問答［10 分］
⑥【内省】振り返りタイム（対話型リフレクション）［5 分］
【評価】
定期試験／小テスト／レポート／パフォーマンス評価（KP 法によるプレゼンテーション・振り返りシート・授業プリント）※簡易版ルーブリックを活用

4．“当事者意識を持った自立した学習者”の育成を主眼とした授業に関する研究会開催報告

中・高・大の接続性を軸として、教職志望の高校生・大学生、現職の教員、教育関連の社会人により、研究会を立ちあげた。2016 年 3 月現在、第 7 回の開催を数え、多様な場で学び合い、高め合う場を生み出した。AL だけにとらわれることなく、さまざまな実践事例を being と doing の両側面で研究報告している。

タイトル：「【第１回】次世代高校教育授業研究会
～変化する社会の中で「次世代の教育のカタチ」を共に学び、考えよう～」
日時：2016 年 2 月 7 日（日）14:00-17:00
場所：マイナビ本社マイナビホール 9F-B
参加人数：50 名（教職志望の高校生・大学生、現職の教員、教育関連の社会人）
実施概要　本研究会では、①「変わりたい」けれどキッカケが得られていない教職員（公立・私立問わず）②意欲的に教育活動を行う大学生（教職希望者以外も含む）③学校を応援したい教育関係者（企業、NPO など）を対象に、単なるセミナーとして一方的に「誰かの学びを受ける」だけではなく、共に学び合う形をとりながら進めている。第一回は専修大学附属高等学校の杉山比呂之・米元洋次を講

師として、中・高・大の接続性を軸とした「アクティブ・ラーニング」をキーワードに実践事例を通して学んだ。「アクティブ・ラーニングって、どうすればいいんだろう…」「自分の授業とどう違っているんだろう」「さまざまな先生方の授業を見て、自分の授業に活かしたい！」という思いの方々が参加した。多様な参加者のため、アイスブレイクによる安全・安心の場づくりからはじめ、多様性を知るワーク、AL を促す日本史及び英語の授業実践の解説、ロールプレイを通じたマインドセットのためのオリエン・ガイダンス授業体験、アクションラーニング［9］によるアクションプランづくりを実施した。スキルだけではなくマインドのバランスを取り入れた学びの場を創出した。「次世代」育成をテーマとしているため、多様な参加者にも関わらず、活発な議論が繰り広げられ、AL にとどまらず広く「教育」という視点で情報交換が行われた。

５．AL を促す意義－現場の実態－

「AL ブーム」、「AL 祭り」は、新たな授業実践や教科・学校の壁を越えた教師のつながりを生む一方、誤解・問題も生むこととなった。一斉授業やティーチングの安易な否定、形骸化したグループワークや探究活動により、アンチ AL も存在し始めた。しかしながら、私自身は AL と出会ったことにより、これまでの「授業／教師」の being にパラダイムシフトが起きた。試行錯誤しつつではあるが、間違いなく AL に出会う前より、授業に対しても教師という職業に対しても真摯な姿勢で being、そして doing と向き合うようになった。そして、それは私の周囲の教師集団にも伝播することとなった。これからの未来、「授業／教師」の being & doing は変化せざるをえない。私自身これからの教師は、「teacher／facilitator／coordinator」の 3 つの役割が必要不可欠であると考えている。激変する社会に対応し、“当事者意識を持った自立した学習者”を育成するために、まずは学校において、教師、生徒、保護者、地域の方々、つまり学校に関わるすべての人々が機能する集団になる必要がある。そのような意味で、現代の日本社会において、本来の学校の機能を取り戻すために、AL を促す授業／教師は必要不可欠である。

６．まとめ－共有ではなく共存を－

「学校とは何か」［10］私は学校及びコミュニティが健全に機能していれば、AL を促す授業を積極的に実践する必要がないと考える。しかしながら、現代日本社会においては、コミュニティの崩壊、遊びの貧困化、学校以外の場での学びの場の減少により、AL を促す授業が求められている。しかし、逆説的に言えば、コミュニティが機能し、遊びが裕福となり、学校以外の場での学びの場が多様化すれば、学校は本来の機能を取り戻すはずである。しかし、すぐにはその変化が起きないのも事実である。ゆえに学校も教師もコミュニティもその多様性を認めつつ、共存していくことが必要ではないだろうか。そして、それを無理に共有しないことも大切である。なぜならその共有が強要になる可能性があるからだ。「AL」このワードに対しての being & doing の絶対解はない。しかし、この「AL」を通じて、私たち教師が“当事者意識を持った自立した学習者”となり「授業／教師」の being & doing と向き合い、納得解を生み出していくことが大切なのではないだろうか。

【参考文献】

［1］アクティブラーニング実践プロジェクト（編著）『現場ですぐに使える　アクティブラーニング実践』産業能率大学出版部（2015）

［2］チーム作り講座 HP：http://www.s-teamdesign.org/

［3］川嶋直ら（共著）『アクティブラーニングに導く KP 法実践：教室で活用できる紙芝居プレゼンテーション法』みくに出版（2016）

［4］ダネルスティーブンスら（共著）『大学教員のためのルーブリック評価入門（高等教育シリーズ）』玉川大学出版部（2014）

［5］中原淳『アクティブ・ラーナーを育てる高校―アクティブ・ラーニングの実態と最新実践事例』学事出版（2016）

［6］岩瀬直樹ら（共著）『せんせいのつくり方』旬報社（2014）

［7］ピーター M センゲ『学習する学校』英治出版（2014）

［8］田村知子ら（共著）『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい（2016）

［9］マイケル・J・マーコードら（共著）『実践 アクションラーニング入門―問題解決と組織学習がリーダーを育てる』ダイヤモンド社（2004）

［10］刈谷剛彦『学校って何だろう』筑摩書房（2005）

（2016 年 12 月 30 日受付）

（2017 年 1 月 19 日採録）